

俳句圖書館鳴弦文庫開館十周年記念「明治俳句文化展」資料

俳句文化涉獵

明治編

秋尾 敏

「挨拶」

皆様に支えられ、俳句図書館鳴弦文庫は開館十周年を迎えることができました。これまでのご厚情に篤くお礼申し上げます。

十周年を記念し、収蔵する明治期の俳諧俳句資料のいくつかを展示することとし、そのおよそを本書にまとめました。明治期の俳文芸が、絵画や書など、周辺のさまざまな文化との交流によって、豊かな世界を作り出していた様子をご覧頂きたいと思っております。

本書は、平成二十三・二十四年に、本阿弥書店『俳壇』誌に連載させていただいた内容が元になっています。機会をお与え下さった本阿弥書店に心から感謝申し上げます。

過去の俳句文化への眼差しによって、現代の俳句文化が、さらに豊かになっていくことを願ってやみません。

俳句図書館鳴弦文庫館長
河合 章 男

もくじ

1	活字句集『俳諧連月千句集』を刊行した岩波其残	2
2	無腸編・小齋画・俳諧一枚摺	4
3	柴田是真画の俳諧一枚摺	6
4	死絵	8
5	河鍋曉翠の挿絵のある返草	10
6	上田聴秋「俳諧五問答」	12
7	金沢の俳諧文化―『秋風集』と大橋卓丈画賛―	14
8	教林盟社関係資料	16
9	明倫講社関係資料	18
10	田辺機一画賛	20
11	席題籤「俳諧五百題」	22
12	市川右團治十三回忌の俳諧一枚摺	24
13	歌川国貞の錦絵「今様発句げいくらべ・菊寿」	26
14	秋元梧楼編『明治百俳家短冊帖』	28
15	俳諧の伝統を今に繋ぐ美濃派宗匠	30
16	『明治俳豪の倂』	32
17	大塚毅編『明治大正俳句史年表大事典』	34

1 活字句集『俳諧連月千句集』を刊行した岩波其残

明治の文明開化で、出版物はたちまち活版印刷となった。しかし、俳文芸の世界では、明治二十年代まで、版本（版本に彫って摺られた書籍）が主流であった。風雅の情緒を重んじたためであろう。

では、俳句を最初に活字にした勇氣ある俳人は誰だったのだろうか。

新聞雑誌ということであれば、慶応三年の『俳家新聞』（弘美編）、明治九年創刊の『風雅新聞（風雅新誌）』などがあり、木製活字の句集では、明治七年刊の『むつみ集』（麻の屋文友編）がある。

金属活字となると、北越の岡田葭堂編『正風俳諧曙抄』が明治十一年刊で、現在分かっている中ではもっとも古いが、それに次ぐものとして、明治十三年刊の『俳諧連月千句集』（岩波其残編）がある。国会図書館に刊年不明のものがあるが、鳴弦文庫には十三年三月刊の第三編がある。「連月」は月次（つきぎ）と同じ意味で、この年の一月から毎月出された句集ということになる。

△図1Vは、その最初のページである。「連月」の「月」の字が脱落しているのが、初期の活版印刷らしい杜撰さで微笑ましい。冒頭は「甘さうに馬の草はむ卯月かな」という句で、「うまそうに」と読むのであろう。ただし、方言周圏論で説明されるように、「あまい」と「うまい」は地方によって交錯するから、「うまい」という意味で「あまい」と読ませた可能性もある。いずれにせよ平明な月並調だが、明るさが評価できる。

編者の岩波其残は信州諏訪俳壇の中心的な俳人である。文化十二（一八一五）年に文出村（現・諏訪市）の豪農、山田両蔵の長男として生まれた。名は鉄蔵（鉄三）という。父の両蔵は、上諏訪中町で旅館兼質屋を営んでいたが失敗して帰農。其残は十九歳で家督を継ぐことになるのだが、農業を好まず、二十八歳で隠居し、俳諧を好んだ母（とみ）の影響もあって風狂の道に入ってしまう。俳諧を久保島若人に学び、蓼妙、再庵、天普、芒老人、鸞友、雪散屋など

多くの号を持ち、絵画、楽焼、彫刻、生花、茶の湯、写真、砲術、製図、音曲などに才能を発揮したというから、大変な風流人である。

やがて諏訪に眼病の治療にきていた尾張藩士の娘（みち）と恋に落ち、出奔。十一年間諸国を放浪し、安政二年にようやく諏訪に戻って、母の実家である岩波家を継ぐ。この自由さが、時代に合わせて俳句を活字で印刷するという発想につながっていくのであろう。

明治期の諏訪地方は、養蚕、製糸産業の経済力を背景に、さまざまな文化が花開いた土地である。俳諧人口も並大抵ではなく、明治十八年に刊行された教林盟社の名簿『結社名員録』に記載された全国千五百十五人の会員中、実に百三十三人が諏訪地方の俳人なのである。長野県全体では三百五十五人。これは、全国の二十三・四パーセントにあたり、二位東京の八十八人を大きく引き離している。その欄の筆頭に置かれているのが其残であるから、全国でもっとも大きな地方俳壇を率いていた俳人と言えるだろう。

△図2Vが其残の描いた絵である。明治二十一年の一枚摺で、正月の礼者を描いている。四条派風を学んだというが、蕪村などの文人画のタッチで描いている。

△図3Vの短冊も其残のもの。「埃立道に雪ちる二月哉 其残」とある。読み易く直せば、「ほこり立つ道に雪散る二月かな」。凡庸に見えるが、十一年に及ぶ放浪生活を思うと、いささかの味わいがある。文字にも蕪村に似た風合いが見られて興味深い。

『俳諧連月千句集』の出版人は藤森平五郎という人で、住所は「信濃国諏訪郡上諏訪村八百九十一番地」となっている。まだ東京でも木版の句集ばかりが刊行されていた時代に、諏訪湖のほとりから活版の句集を刊行した其残という俳人は、かなりモダンな感覚を持った自由な風流人だったに違いない。『花岡集』（明治10）、『俳諧早合点』（明治12）、『明治増題俳諧新部類』（明13）、『増補探題早合点』（明20）、『草の餅』（明26）などの著書を残し、明治二十七（一八九四）年、其八十歳でこの世を去った。諏訪市の地藏寺に葬られている。

〔図1〕



〔図2〕



〔図3〕



2 無腸編・小齋画・俳諧一枚摺

〔図4〕は、明治十一年、後に八千房^{はっせんぼう}を継ぐ土居無腸が、大阪と宇和島の仲間の句に著名な宗匠の句を添え、小齋の絵をあしらった摺物である。

無腸は、本名、土居通夫。大阪では知らぬ人のない財界人で、通天閣の「通」は、彼の名から取ったという説まである。司馬遼太郎の小説「花屋町の襲撃」では、坂本龍馬暗殺の復讐を謀る陸奥陽之助（宗光）に雇われた刺客「後家鞆の彦六」として登場する。どうやらこれは創作らしいが、彼が居合抜き^{ごけさや}の達人で、龍馬らと交流があったことは確かだろう。

無腸は、天保八年（一八三七）、宇和島藩士の家に生まれた。幼名は万之助。両親ともに俳号を持つ人であった。養子に行き彦六を名乗るころには居合の達人となっていたが、竜馬の影響を受けて脱藩。明治になって大阪府や司法省の役を経て、鴻池家の再建に従事。二十一年に大阪電灯会社を起し、以降、日本硝子製造、日本生命、大阪毎日新聞など十社を超える企業の経営に携わった。二十七年には衆議院議員となり、翌年からは大阪商業会議所会頭を死ぬまで務めている。三十六年には内国勸業博覧会を大阪に誘致。パリに赴いてパリ万博の手法を持ち帰り、エッフェル塔を模した通天閣の建造を提案したという。無腸に関する資料は多いが、平成十三年に創風社出版から出された木村博民著『通天閣―第七代大阪商業会議所会頭・土居通夫の生涯』によくまとめられている（図7）。

無腸は多芸の文化人でもあった。囲碁は財界随一の腕前と言われ、浄瑠璃は竹本摂津大掾の弟子となつて玄人はだし。書も文人画も一流だったという。俳諧は松木淡淡の流れを汲む二疊庵桃^{とうけい}分に学んで、明治二十五年に八千房七世流美が没すると、その跡を継いで八世八千房となっている。

旧派の宗匠にも、国の近代化に足跡を残した人は少なくない。貴

族院議員の森山鳳羽、静岡の近代化に力を尽くした松島十湖など枚挙にいとまがない。新派ばかりを見て、こういう人たちを除外してしまう今の俳句史は、どこか歪んでいる。

絵を描いているのは、田能村小齋である。小齋は、弘化二年（一八四五）播磨国（兵庫県）に生まれた。本姓は大野。名を順^{ちよ}といひ、字は子慎、通称順之助。田能村家の養子となつて、養父の直^{ちよ}入に南画を学んだ。武芸にも長じ、豊後（大分県）岡藩につかえ、維新後は大阪、京都で画家として活躍。明治四十二年（一九〇九）に没した。無腸とは同じ関西の文化人同士として交流があった。

句は、最初に東京、京都、大阪の著名俳人の作を置いている。芹舎の「夜の新しいや」が感覚的でよい（図5）。この後、故郷宇和島と勤務地大阪の句が続く。当時、大阪高等裁判所の判事だった無腸だが、公職のかたわら、中央俳壇とつながりを作りつつ、独自の地方俳壇を形成していたことが分かる。

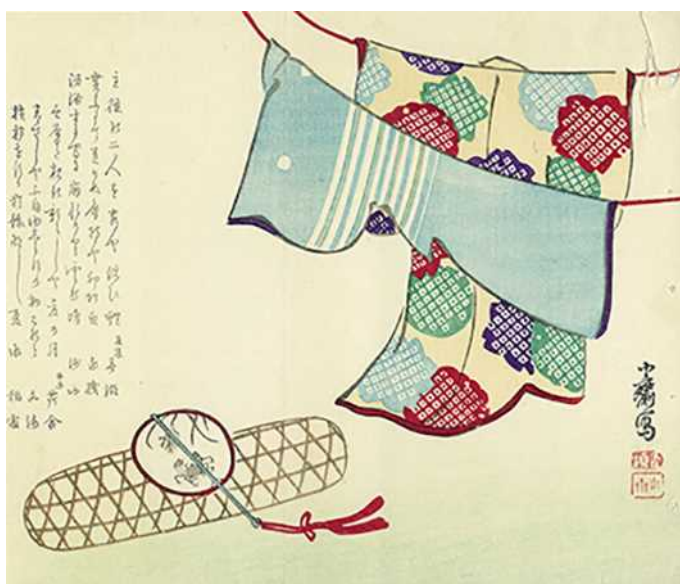
主 ^{しゅ} 従の二人を客や洗ひ鯉 ^{りゅう}	在京	春湖
貰 ^{もら} ふたて置けぬ氣持や初松魚		永機
湯浴する間に崩れけり雲の峰		沙山
今暮た夜の新らしや夏の月	西京	芹舎
青さしや不自由しらすの物このみ		文海
挨拶をする猶予なし夏氷		稲処

末尾に無腸の三句が載る。二句目の「小くら」は、小倉と小暗の掛詞。三句目の蟹には無腸の生き方が見える（図6）。

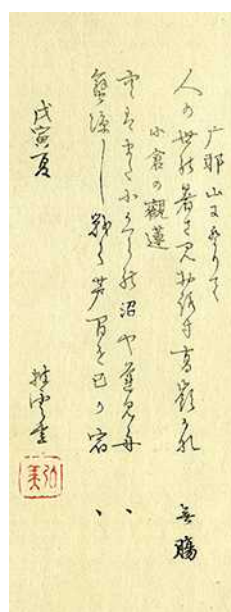
戸那山に登りて	
人の世の暑さ見おろす高嶺かな	無腸
小倉の観蓮	
空はまた小くらの沼や蓮見舟	
蟹涼し戦 ^{いくさ} く芦間を己か宿	、



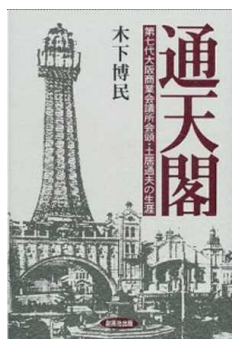
〔図4〕 全体



〔図5〕 冒頭拡大



〔図6〕 末尾拡大



〔図7〕

3 柴田是真画の俳諧一枚摺

俳諧一枚摺はいかいいちまいずりというのは、明治時代まではよく作られた木版の摺物で、句を並べて絵を付したものだ。歳旦や何かの記念の配りものに使われた。その起源は浮世絵や錦絵より古いと言われる。

鳴弦文庫に百枚ほどある一枚摺の中に、柴田是真画のものを三枚発見して下さったのは、筑波大学の綿拔豊昭教授である。

是真は、文化四（一八〇七）年、江戸両国に生まれた漆工・画家で、近年、別冊『太陽』に特集され、ここ数年、横浜美術館、三井記念美術館、相国寺承天閣美術館などで大々的に展示されて、その異様なまでに細密な作風が注目を浴びている。

十一歳から蒔絵を始めた是真は、京に上つて絵画を岡本豊彦に学び、また歌学・国学を香川景樹に、漢学を頼山陽に、茶道を吉田宗意に学んで、奥の深い文化人となり、江戸に戻った。

江戸で実力を認められるようになった是真は、さまざまな漆の新技法を開発。明治になってからは内国勸業博覧会の審査員も務め、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会で進歩賞牌を受賞。皇居の杉戸絵なども描き、二十三年（一八九〇）に初代の帝室技芸員となつて、工芸界の重鎮となつた。翌二十四年、八十五歳でこの世を去った。

著名な工芸家であつた是真が、俳諧一枚摺の絵を描いているのは、自身も俳諧を嗜んだからである。飛鳥園一叟、橘田春湖に学んだという。一叟は、杉山杉風の門流の飛鳥園に代々受け継がれた名で、春湖は明治俳壇の中心人物。是真は、俳諧でも一流の人たちと交わっていたようである。

図の三枚の一枚摺は、全紙（新聞一面ほど）を横長に折つた鳥の子紙に摺られている。

（図8）は明治十四年一月のもの。七十五歳の作で、写真では分かりにくい、紙切り包丁と、それによつて裁断された白、青、緑、

赤の紙の図である。歳旦の刷物で、著名な俳人の百五句が載る。巻頭は詢堯じゆんぎやう斉。

うぐひすにあてがうておく小庭哉

詢堯じゆんぎやう斉

詢堯じゆんぎやう斉は元津藩主の藤堂高猷たかゆきである。幕末の政変に活躍した財政通で、よく算盤をはじいていたというが、一方で和歌、詩文、書画に長じ、俳諧は鳳朗、春湖に学んでいる。能も玄人の域に達していたというから、高度な文化を身につけた人々の交わりが、俳諧という場で形成されていたということであろう。

（図9）は明治十七年八月のもので、是真七十八歳の作。水鉢に朝顔と絵筆が書かれ、三十三句が載る。鶯笠という俳人が旅に出る際の送別の一枚である。巻頭句は芹舎。

すぐ風やけふはどちらへ吹がよき

八十齡芹舎

芹舎は京都の宗匠で、当時の俳壇の長老格である。

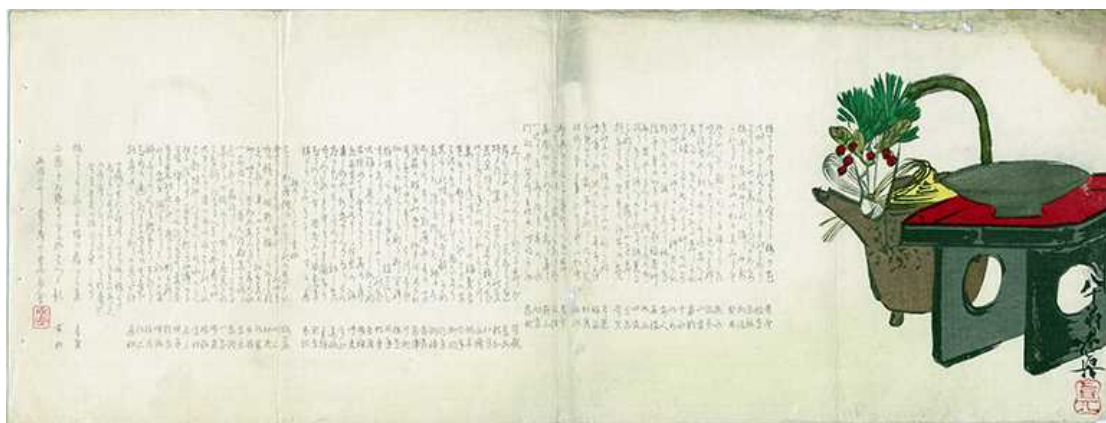
（図10）は明治十九年、是真八十歳の作で、長寿の松と、難を避けるという南天が飾られた提子ひさごと盃の絵。甫山の還暦を一年後に祝つた一枚で、七十句が載る。巻頭はこれも芹舎。

待てど今咲ては寒し梅の花

芹舎

綿拔教授は「還暦を迎える前の気持ちと後の気持ちを、梅の花にたとえて詠んだもので、さすがに手馴れている」と評されている。

是真の絵は、その細密な蒔絵や漆絵と比べれば、いささか粗い描き方にも見えるが、しかしこの三枚は、明治中期の一流の文化人の交わりを伝える貴重な資料である。



4 死絵

死絵は、錦絵（浮世絵）のコレクターにとつては常識的なものが、俳人にはあまり知られていないようである。

人気役者が死んだときに摺られる錦絵が死絵で、明治期まではかなり作られていた。多くはそこに発句や狂歌が書かれているので、俳句文化から見ても重要な資料である。

〔図11〕は、明治十五年（一八八二）に、八代目岩井半四郎が没したときの死絵である。右上に、「明治十五年二月十九日」「行年五十二年五ヶ月」と記されている。この絵に限らず死絵は、役者の生没を確認できる資料として、歌舞伎の研究者に重宝されている。

画は、揚洲周延（ちかのぶ）。通称を橋本太郎と言ひ、越後の高田藩士であつたが、幕末に函館に駆けつけ、榎本武揚の下で官軍と戦つた。

天保九年（一八三八）に生まれた周延は、十五歳で国芳に絵を学び、三代目豊国の門に入つて、武士でありながら二代目歌川芳鶴、一鶴斎などを名乗る浮世絵師となつた。その後、豊原国周門となつて、周延を名乗る。

慶応元年（一八六五）、幕府の第二次長州征討に従軍。同四年には、上野彰義隊に加わり、脱走して箱館戦争に加わつた。下級武士であるが、絵師として有名だつたろうから、五稜郭で土方歳三と句会をしたメンバーだつたかも知れない。三月の宮古湾海戦で重傷を負つて降服し、禁固刑となつて高田藩預かりとなるが、やがて東京に戻つて浮世絵師として明治を生きた。

この死絵を描いた明治十五年には、第一回内国絵画共進会に出品して褒状を受けている。後に、江戸城大奥の風俗画を描いて江戸浮世絵の再来と評判を取り、また、西洋の服装を着た女性画も描いて人気があつた。大正元年に七十五歳で没している。

画の左に書かれている句は、

たよる木のかれてあたりの寒さかな

本人の辞世ではなく、誰かが詠んだ追悼句のように思える。死絵の句は、本人の辞世とか、本人が詠んだように作られた句が書かれることが多いのだが、これは少し違う感じがする。

彫師の名があつたり、左下に奥付のような欄があるのも明治期らしい。職人の名前が記される時代になったということである。

手に杖を持っているが、これも死絵の特徴の一つで、手に何かを持たせることで尋常の人ではないことを示している。

〔図12〕は、明治三十六年（一九〇三）に、五代目尾上菊五郎が没したときの死絵であるが、こちらは、戒名、本名、菩提寺、当たり役の「牡丹灯籠」などの情報が満載である。

この菊五郎は、手に何も持っていない。死絵では珍しいことである。そもそも描かれているのが「牡丹灯籠」の世界で、死人を演じているのであるから、そんなものはいらないということなのだろう。お露の死霊が牡丹灯籠を提げて恋人新三郎のもとに通うという話であつて、手に提げるべき灯籠を大きく描いたということでもあるだろう。

書かれた句は、

散る梅に見あける空の月清し 梅幸

これは本人の辞世句である。署名の「梅幸」は、五代目菊五郎の俳名。もともと初代菊五郎の俳名が梅幸だつたのである。

右下に豊齋筆とあるが、これは三代歌川国貞である。国貞は、嘉永元年（一八四八）、江戸日本橋に生まれ、三代・四代の歌川豊国に学んだ浮世絵師。明治二十二年（一八八九）に三代目として国貞の名を継ぎ、香蝶楼を名乗つた。明治二十四年（一八九一）から豊齋を名乗っている。文明開化絵や役者絵を描き、初代市川左團次の似顔絵を得意とした。大正九年（一九二〇）没。

〔図11〕



〔図12〕



5 河鍋曉翠の挿絵のある返草

返草^{へんそう}というのは、句会の入選句を記載し、入選者に無料で配る摺り物である。江戸期からあり、一種の賞品であるから、挿絵が摺られ、記念の価値を高めているものも多い。ともかく全国で数多く作られていて、いったいどれほどあるのか見当が付かない。

現在、全国の図書館で確認できる明治期の返草は千冊程度で、そのうち三百ほどを鳴弦文庫が架蔵している。しかし、それはこうした資料を本気で集めている図書館がないということで、実際には数千、あるいは数万という返草が作られていたに違いない。というのは、今の俳誌と同じで、月並俳句というのは、この返草を毎月刊行していたのである。

〔図13〕は、明治二十四年三月に刊行された『深川成田山新築額堂永代大奉額句集』という返草の表紙と見返しである。これを三つに折って、右部分が表紙となる。

発行者は東京深川区の折山文治郎で、三森幹雄、鈴木月彦ら、当時の著名な宗匠に選句を依頼し、返草としては厚手の十六丁（三十二ページ）という句集を編んでいる。さすが名刹の額堂新築を祝う句会だけあって、巻末には「集句参万余」とある。深川不動尊は、戦災で一切の資料を焼失しているということであるから、その意味でもこれは貴重な資料である。

この返草のもう一つの価値は、挿絵を河鍋曉翠^{きようすい}が描いているところにある。

曉翠は、かの河鍋曉斎^{きようさい}の娘。明治元年十二月、東京の本郷に生まれ、幼児から父の手本で絵を描き、数え年十七歳で内国絵画共進会に出品。二十二歳で父曉斎を亡くした後も精進を続け、明治三十五年には、女性として初めて女子美術学校の教授となっている。

この挿絵は、曉斎没後一年を経た頃の作ということになるが、すでに熟達した技術と配慮を見せている。芭蕉の句「花の曇鐘は上野

かあさくさか」の下で刃物を研いでいるのは。鍛冶であろうか宮大工であろうか。句の「雲」が「曇」となっているのは字面の問題であろう。鐘の音を聞きながら仕事をしているような印象を受ける構図である。深川の芭蕉庵で詠まれた花の句は、深川不動の新築祝いにはうってつけであるし、刃物を研ぐ図は、新築と句の推敲に重なる内容であろう。全体を額で囲っているのは、この句会が成田山の額堂の新築を祝うものであるからで、実際に入選句を書いた額が、新築の額堂に飾られたに違いない。

発句は、芭蕉の句に続いて判者七人、副判八人、判者（地元の判者であろう）三人の発句と続く。判者の七句を読んでみよう。

名月や／＼とて立居かな

ミキ雄

春待や心に梅を薫らせて

龍吟

花の夜明是もからすの誘ふのか

梅来

夕照に松も見栄る紅葉かな

笛羅

其としの御鬪取る日や笑ふ梅

三重女

はつ冬や苅田の水に朝の月

月彦

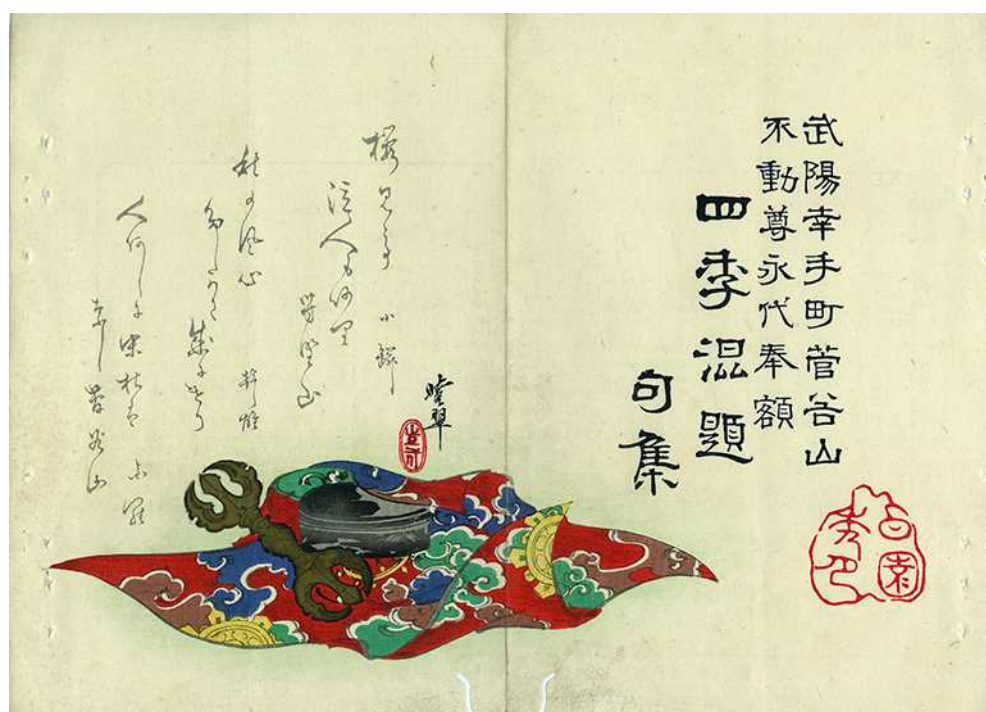
あらためて花咲揃ふ卯月哉

春喬

月彦だけ妙にまっとうな蕉風であるのが面白いが、大方は俗に流れた月並調で見るべきところがない。むしろ副判の尚古の「のどかさや何処へ野水の行とまる」の方が、この三年後に俳壇に登場する正岡子規の句に通じるところがあつて味わい深い。

〔図14〕は、明治二十五年の『武陽幸手町菅谷山不動尊永代奉額四季混題句集』の表紙。中央で二つ折りにして、右が表紙である。独鈷の図と思われる。

数年前に京都の相国寺承天閣美術館で行われた「ハンブルク浮世絵コレクション展」には、父、曉斎の絵があしらわれた俳諧一枚摺が展示されていた。それも、関為山、鳥越等裁ら、当時の著名な俳人の句が載る摺り物であつたが、父娘ともに俳諧文化に深く関わっていたようである。



6 上田聴秋「俳諧五問答」

上田聴秋は、明治中期から昭和初期にかけて、京都を拠点として全国的に活動した旧派の俳諧宗匠である。嘉永五年（一八五二）に美濃国（岐阜県）に生まれ、京に上つて八木芹舎の門に入り、不識庵を名乗った。明治十七年、梅黄社を興して活版で「俳諧鴨東集」（のち「鴨東新誌」）を刊行すると、読みやすい活字の月並俳誌として人気を博し、若手の選者として全国に名を知られていく。

明治二十三年に師の芹舎が没すると、その号であつた「泮水園」と「花の本」を名乗るようになる。花の本は二条家より授かつた由緒ある号であるから、聴秋の名声はさらに高まり、大正、昭和になつても、近代俳句になじめない人たちが聴秋のもとに集まつた。昭和七年（一九三二）没。「海程」同人で自由律俳句の研究者としても知られた上田都史は聴秋の孫だという。

〈図15〉の「俳諧五問答」は、俳諧の心得を書いて門弟に与えたものと思われる。

一問目、俳諧の楽しみを「廁に入りて梅の香をきく」というのは和歌との違いを言っている。廁では和歌にはならない。二問目の、花に笑いを含み、月に泣くのが俳諧の心だというのもまっとうな答えである。

問題は三問目で、俳諧の姿を自然界のイミテーションととらえているところがおもしろい。近代俳句が写生を強調し、現実世界を言葉がそのまま表現できるという楽観主義に陥っていくのに対し、旧派の聴秋は、実際の世界と虚構の世界が別のものであることをちゃんと心得ていたようである。さらに、「雪で作りたる兔の如く、飴で造りたる鳥のごとし」が尋常と思われるのに、それを逆に言っているのは、いささかのひねりが必要だということも暗示しているであろう。

四問目の、俳諧の「玄妙」に対する、烏も鳥、鳳凰も鳥だという

回答もおもしろい。たしかに俳諧、俳句の世界というものはそういうところがあつて、凡庸な事物に幽玄を見ることができると、また別の意味では、初心者的一句も芭蕉の一句も句であることにかわりはないのである。

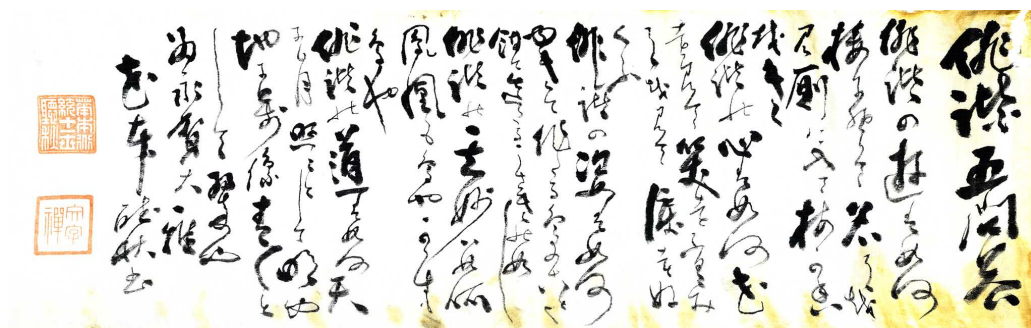
最後は、俳諧の道が造化の美の中にあることを言つて終わるのだが、こうした俳諧観は、当時の旧派俳人にとっては一般的なものであつたろう。

下段の〈図16〉は、聴秋の発行していた「俳諧鴨東集」の表紙。〈図17〉は短冊である。

明治十七年創刊の「俳諧鴨東集（俳諧鴨東新誌）」は、活版の俳誌としては、『俳諧新報』（明治十二年創刊）、「俳諧友雅新報」（明治十三年創刊）、「俳諧明倫雑誌」（明治十三年創刊）に次ぐ。

白雲清水	心まで洗ふ新茶や宗祇水	聴秋
乙姫瀑布	はつもみちはつかしさうに瀧をてる	聴秋
初音河鹿	澄や秋月のこたます河鹿かな	聴秋

短冊の右の二枚に書かれているのは、聴秋の故郷である岐阜県の郡上八幡の名水に因む句である。文明三年（一四七一）、飯尾宗祇に古今伝授を行った美濃篠脇城主東常縁が、この名水で墨を摺り、「もみじ葉の流るる竜田白雲の花のみよしの思ひ忘るな」と書き送つたという故事からきている。左の河鹿の句は「月のこだます」がかなりひねつた表現となつていて、聴秋の俳諧観が投影されている。いずれも故事を踏まえた割には分かりやすい句である。



「俳諧五問答」

俳諧の遊は如何
 楼に登りて名月を
 見 厠に入りて梅の香
 をきく
 俳諧の心は如何 花
 を見て笑をふくみ
 月を見て涙をぬ
 くふ
 俳諧の姿如何
 ゆきて作たる鳥のこどく
 飴て造たるうさきの如し
 俳諧の玄妙は如何
 鳳凰も鳥やからすも
 鳥也
 俳諧の道は如何 天
 に日月照々として明也
 地に萬像青くと
 して翠也
 為永賀大雅
 花本聰秋書
 印 印



7 金沢の俳諧文化 ―『秋風集』と大橋卓丈画賛―

江戸時代の俳諧史を、金沢という文化都市抜きに考えることはできない。高桑闌更、成田蒼虬、桜井梅室という三人を京に送り出したというだけでも、その影響力の大きさは想像がつく。さらにその影響力は、明治時代にも及んでいる。

梅室は、明和六年（一七六九）、金沢に生まれ、藩主に仕える代々の刀研であつたが、文化元年（一八〇四）に隠居して京に上り、天保から嘉永期までの俳壇の中心を担った。

その梅室の弟子に句空庵四世雪袋がいる。雪袋は、『闌更句集』など多くの句集を編んで、金沢俳諧の伝統を明治に繋いだ人である。明治十六年、桜井梅室の揮毫した芭蕉句碑「あか／＼と日は難面も秋の風」を、兼六公園に移築することになり、雪袋は、それを記念して、句集『秋風集』（明治十七年刊）を刊行する。（図18）は、その表紙と口絵である。絵師右巖については不明だが、金沢の絵師であろう。

言うまでもなくこの句は芭蕉が金沢で詠んだもの。この句碑は今も兼六公園の山崎山のふもとに佇んでいる。江戸俳諧のこうした伝統は、金沢の近代俳句に大きな影響を与えている。

（図19）は、これも梅室の弟子で、金沢出身の大橋卓丈の画賛である。卓丈もまた金沢に生まれ、京に上って活躍した幕末の俳人である。全国的には有名でもなく、明治維新の直前に没してもいるが、江戸俳諧を明治につなぐ時代の俳人として、また、金沢と京の俳壇のつながりを教えてくれる俳人として、ここに紹介しておきたい。

大河良一著『加能俳諧史』（清文堂出版・昭和四十九）によれば、卓丈は文化十年（一八一三）の生まれ。石橋姓であつたものを後に大橋に変え、名は貞であつたが、これも和春としている。母の名は恵善で、金沢の徳英寺に残る過去帳の注記に「割場附故惣右衛門妻」とあるというから、その惣右衛門が父であろう。

加賀藩の御坊主を務めていたが、酒癖が悪く、職を解かれて京に上り、桜井梅室の門に入った。時雨庵を名乗っていたが、梅室の弟子の十丈園天然居士が死去すると、その号を継ぎ、加茂川十丈・大橋十丈を名乗って能筆の俳諧師として活躍。梅室の句集には「卓丈こたひ十丈園の席を継ぐ事になりしを祝して 花も実も穂を継ぐ時のころかな」とあるというが出典は不明（『梅室家集』にこの句はない）。今の心得が大事だという戒めの句であるから、梅室も、やはり卓丈の行状を心配していたのかもしれない。慶応元年（一八六五）十一月三日、卓丈は五十四歳で越中で客死した。

高畠鳳外編『加賀能登の書 郷土著名人の筆跡』（北国出版社・昭和四十九）には、「松の香の無理なきための朝嵐」「孝行に品ありけふは小松曳」という卓丈の二句の揮毫が紹介されている。何やら理屈っぽい句であるが、墨痕は見事なものである。

さて、（図19）であるが、「寒月やさしもの鶴も夜のてま」と読める。「てま」は「手間」であろう。難解句であるが、「焼け野の雉子夜の鶴」という諺に基づく句と思う。雉子は野火から命がけで子を救おうとし、鶴は寒夜に羽で子を暖めるということで、親の情愛の深さのたとえである。句意は、立派で目出度い鳥として敬愛されている鶴も、寒月の夜は子育てに手間がかかって大変なのだ、ということ。川柳のような発想の作りだが、「夜の鶴」の出所は『白氏文集』であるから、古典を踏まえての句ということにはなる、画の中で鶴を引いている人も家族のために働いているのだと気づかされるおもしろさもある。

絵は佐々木泉玄。文化二年（一八〇五）に金沢で生まれ、明治十二年（一八七九）まで生きた加賀藩お抱えの狩野派の絵師である。歴史画や写生を色彩豊かに描くことを得意とした人らしいが、ここでは墨一色で省略の効いた絵を描いている。力を入れた脚の描写がすばらしい。

〔図18〕『秋風集』とその口絵



右巖写〔印〕

あか／＼と日は
難面も
秋の風
梅室書

〔図19〕寒月やさしもの鶴も夜のてま 卓丈



8 教林盟社関係資料

教林盟社は、明治七年四月に設立された俳諧結社で、同年八月に設立された明倫講社と明治前期の俳壇を二分した団体だが、機関誌を発行していなかったため、その活動がよく見えてこない。

一方の明倫講社には、『俳諧明倫雑誌』という月刊の機関誌があるため、かなり細かく活動を追うことができる。そのため、教林盟社は、結社としての活動が消極的だったという評価が一般的になってしまっている。

だが、両団体とも、明治政府の教化政策の中で作られた団体であり、政府の定めた俳諧教導職を引き受けていたわけであるから、何も活動をしなかったということはありません。

そこで、教林盟社関係の資料を集めてみた。

〈図20〉は、句集『真名井』で、明治七年四月に教林盟社が結成されたときの記念句集である。

〈図21〉は、教林盟社が明治十一年から毎年出していた句集『時雨まつり』（内題『時雨祭集』）の第一編。

〈図22〉は、明治十八年刊行の『結社名員録』で、全国の会員の住所、氏名が分かる。

これによると、会員は全国に千五百十五人。「長野県信濃国」の三百五十五人が最も多く、二位が「東京府下」の八十八人、三位が「広島安芸国」の八十三人となっている。

第一章に記した岩波其残以外にも、歴史に名を残した人の名がかなり掲載されていることに注目したい。

例えば、「東京府下」の「梅雄 日本橋区通四丁目 茂木房五郎」というのは、千葉県野田町の醸造家で、他の茂木家や高梨家と明治二十年に野田醤油醸造組合を結成する人。大正六年には、それが野田醤油株式会社となり、やがて現在のキッコーマンとなる。

「千葉県下総国」の「釣月 葛飾郡堀江町 大塚亮平」は、東京

湾の海苔養殖業の基礎を築いた人で、浦安市堀江の大蓮寺境内に「大塚亮平顕彰碑」が建てられている。その碑文によれば、釣月は秋江庵と号した俳人で、明治になって堀江小学校を創設。堀江村学校事務掛、副戸長、戸長、堤防取締などを務め、宮内省御用掛並びに江戸川筋御狩場監守、勸業委員などを歴任。明治十七年からは堀江村の漁業共同組合長となり、東京湾水産諮問会郡総代を務め、一府五県連合水産共進世話掛ともなつて東京湾の漁業の近代のために働いたという。明治十八年には、有志と東京府に海苔養殖場の設置を申請。漁業関係者からの反対を説得し、養殖を始めた人だという。

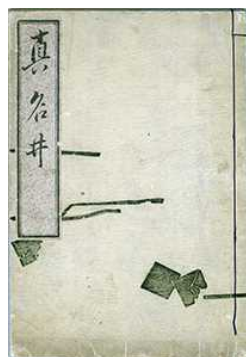
同じく「蕉巢 豊田郡水街道宿 田中嘉兵衛」とあるのは、現在の茨城県常総市水海道で醤油醸造などを営んでいた釜屋嘉兵衛であろう。釜屋嘉兵衛は、近江国辻村の鋳物師の流れを汲む近江商人で、江戸時代の「関八州田舎分限角力番付」という地方の分限者を載せた番付にもその名が見える豪商。辻村で作った鍋釜を全国に売り歩いていたが、運送費が掛かるので、一族が各地に散らばって生産を始めたらしい。

「長野県信濃国」の部の「香雪 高井郡赤岩村 湯本佳録」は、井上円了とともに京北中学校を創設し、また寺田勇吉と精華学校を創った湯本武比古。安政二年（一八五六）に生まれ、ドイツに留学し、皇族への教育法を研究。帰国して、東宮御用掛、学習院教授、高等師範学校嘱託教授などを務め、『新編教育学』（一八九四）等を著してヘルバルト教育学の普及に努めた。

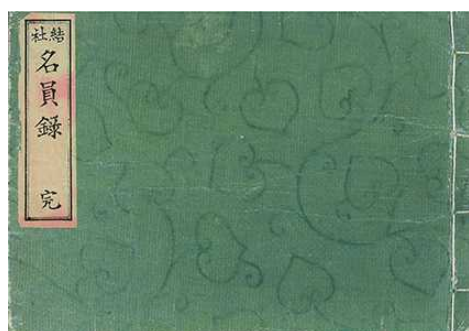
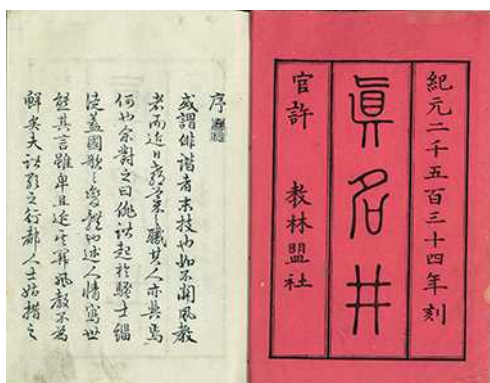
「神奈川県相模国」の「閑茶 高坐郡上溝村 榎本儀兵衛」は、明治三年に上溝市場を開設した人。儀兵衛は国に陳情して市場を開設し、八王子や江戸に運んでいた生糸を、自力で横浜に運び、貿易商人との取引を始めたのである。

こうしてみると、教林盟社には、近代の学問を身に付けた人や、経済力のある人が多く、従来考えられていた文明開化を理解できない古くさい旧派宗匠の集まりというイメージとはかなり異なるのではないかと思われるのである。

〔図20〕句集『真名井』（明治七年）



〔図22〕『結社名員録』（明治十八年）



〔図21〕『時雨まつり 第一編』（明治七年）



教林盟社分社 京都府八幡通春日 教林盟社山口 桃分 新潟県新潟市 教林盟社 水閣 善則 長野県長野市 教林盟社 岩波其残 長野県長野市 教林盟社 共盟社 松本一枝 長野県長野市 教林盟社 親睦社 松樹古漁 長野県長野市 教林盟社 加藤社 加藤事松 長野県長野市 教林盟社 夕陽社 葛西喜水 長野県長野市 教林盟社 隆法社 二宮一鳳 長野県長野市 教林盟社 三山 貞雄 長野県長野市 教林盟社 瑞穂社 瑞穂春湖 長野県長野市 教林盟社 瑞穂社 瑞穂凌冬 長野県長野市 教林盟社 瑞穂社 瑞穂一壽 長野県長野市 教林盟社 瑞穂社 瑞穂九峯 長野県長野市 教林盟社 瑞穂社 瑞穂山司松 長野県長野市 教林盟社 瑞穂社 瑞穂吉原雨		東京府下 桂花 幸鳴氏 宇山 間宮氏 梅雄 茂木房五郎 照平 前田藤吉郎 晚香 八尾八左門 三守 綾部新英衛 曉甫 小笹平義衛 青丘 島本半七 飛猿 市川團六 玉守 浅香龍八 梅姿 九國勘造
---	--	---

9 明倫講社関係資料

明倫講社は、明治七年に三森幹雄が結成した俳諧結社である。最盛期には全国に三千人を超える会員を有したといい、明治十三年からは機関誌『俳諧明倫雑誌』を月刊で刊行。芭蕉を神格化し、神社を建てて、国家神道の体制に乗って活動を広げた団体である。

幹雄は、鈴木月彦とともに、国の教導職の試験に最初に合格した俳諧宗匠として知られている。教導職の試験は、明治政府の打ち出した近代化の理念への理解を問われる試験であった。

教導職となった幹雄は俳壇での発言力を増したようで、明治七年四月に、月の本為山を社長として教林盟社が結成されると、その八月に、自らが社長となって明倫講社を設立する。本局は、日本橋区蛸殻町二丁目四番地。現在の水天宮のあたりである。

〈図23〉は、『俳諧明倫雑誌』の明治十五年一月号。鳴弦文庫の架蔵するなかではもともとも古いもの。第十四号である。

また、〈図24〉は、明倫講社が明治二十二年十二月から刊行した『俳諧矯風雑誌』の第十九号である。これは、旧来の俳諧を正風に改革しようとする思いをより明確にした雑誌で、三年後の正岡子規の俳句改革の呼び水になったとも考えられる俳誌である。

これらの雑誌が存在するので、明倫講社については大方の活動が分かっている雰囲気になっているのだが、実はまだまだ分かっていないことは多い。特に、三森幹雄を継ぐべき次世代の俳人たちは、正岡子規の登場によってその姿をかき消され、俳句史の外に置かれたままである。

〈図25〉は、上が渡辺桑月が浅草から刊行した『正風俳諧真の栞』の第一号と思われるもので、明治二十八年六月の刊行。下が明治三十三年十月刊の六十九号であるから、少なくとも五年以上は継続した俳誌であるが、こうしたものに触れる俳句史は皆無である。

渡辺桑月は、弘化三年（一八四六）、福島県川俣に生まれ。本名

渡辺弥一郎。真風舎を名乗る能筆家で。明治二十二年、俳文芸のさまざまなジャンルを網羅した二百十九丁の句集『明治俳諧金玉集』〈図26〉を編んで上京。明倫講社で指導的な立場となった。『正風俳諧真の栞』は、『俳諧矯風雑誌』の精神を受け継ぐ俳誌である。

〈図27〉は、一事庵史栞（しきん）の『俳諧季寄発句独稽古』である。史栞もまた明倫講社に属し、三十冊もの俳書を残している。その多くが幹雄の養子となった三森松江と共著であるから、明倫講社の中枢を担っていた人と思われるが、生地、生没ともに不明。国会図書館にさえその名を史栞（しかん）とされている資料がある。旧派の俳人がきちんと調べられてこなかった証左であろう。

『俳諧季寄発句独稽古』の序に三森松江が「史琴詞兄は栗庵宇山叟の門人なり」と書いている。宇山は美濃派。西園寺公望の俳諧の師である。一事庵は六世芭蕉堂公成の旧号だったが、公成は慶応四年に刺殺されている。史栞が一事庵を継いだ経緯も不明である。

文苑閣から明治十七年出された『開化普通漢語用文』の責任表示を国立国会図書館は「鈴木喜右衛門（史栞）編」としている。しかし『俳諧発句五百題』の編者は「一事庵馬場史琴」である。名字が鈴木か馬場かも分からないのである。今後の探索を待たしめない。史栞の主な著書を挙げておく。

『今人大家俳諧増補新六百題』宇山編 史栞校 文雅堂 明21
『俳諧発句五百題』『俳諧発句七百度』『俳諧発句六百度』 史栞編 仙鶴堂 明24

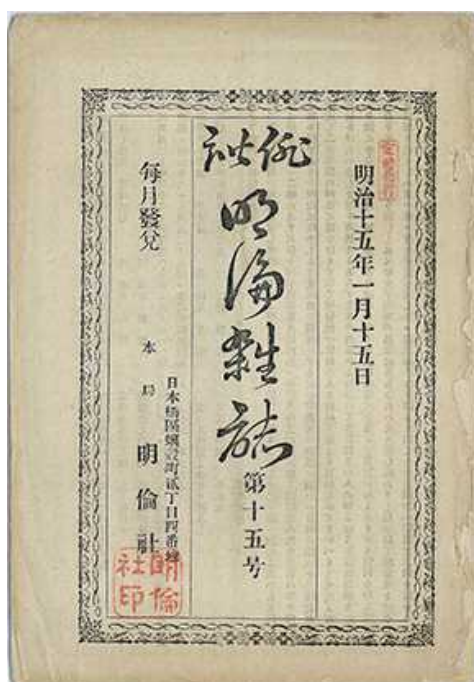
『俳諧発句九百題』史栞編 弘文館 明24
『俳諧季寄発句独稽古』史栞編 三森松江閣 弘文館 明25

『俳諧発句千題集』史栞編 弘文館 明25
『絵入俳諧季寄手引草』史栞編 松江閣 弘文館 明26

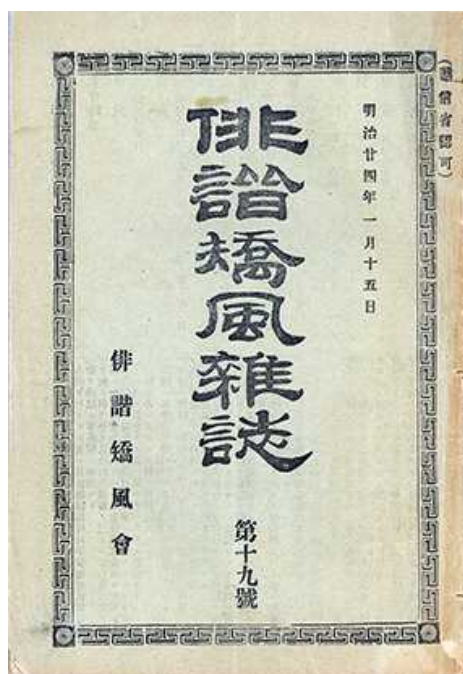
『四季秀逸俳諧発句五千題』史栞等編 上田屋 明27
『俳諧発句名吟集』史栞編 松江閣 弘文館・尚古堂 明27

『俳諧名家発句集』史栞編 細鱗舎松江閣 弘文館・尚古堂 明27
『四季秀逸俳句精選』史栞編 春江堂 明41

〔図23〕『俳諧明倫雑誌』第十五号



〔図24〕『俳諧矯風雑誌』第十九号



〔図25〕『正風俳諧真の葉』



〔図26〕『明治俳諧金玉集』



〔図27〕『俳諧季寄発句独稽古』袋と下巻



10 田辺機一画賛

〔図28〕は、八世其角堂田辺機一が、その息子の永湖の桜の画に付した画賛である。永湖はのちに九世其角堂となり、江戸俳諧の命脈を昭和に繋ぐ数少ない俳人の一人となる。句は、

思ひてに昔語らむ華こゝろ

と書かれている。今風に書けば「思い出に昔語らん花心」ということになる。「乙卯叟晋機一」と署名されている。

田辺機一は、安政三年（一八五六）、江戸神田の生まれ。七世其角堂穂積永機の門人で、明治二十年に永機の其角堂を継承した。

これには裏話が残されていて、明治二十年が芭蕉の没後二百年にあたるため、永機は、義仲寺で芭蕉二百回忌を開催したいと考えたのだが、資金が足りない。そこで、多くの弟子を立机（宗匠となること）させ、号を継がせて資金を作ったのである。一説によれば、当時の金で二百円余りを集め、それをすべて義仲寺で使い切った帰ってきたという。現在の貨幣価値で言えば数百万円と言うことになるだろう。現在、義仲寺の翁堂に残る芭蕉の肖像画なども、消失していたものを、そのとき永機が復元したものだという。

要するに機一という人は、大枚をはたいて八世其角堂となったのであるが、実力もなかなかのもので、『都新聞』『万朝報』などの選者を務め、書も掲載した画賛から分かるように個性的で美しい。さらに『発句作法指南』（明25・穎才新誌社）、『支考全集』（明31・博文館）、『万朝俳句選』（明42・如山堂書店）、『正風明治俳句集』（明44・双樹庵）など多くの著書も残しているから、機一に其角堂を譲った永機の目に狂いはなかったということになる。

一方、画を描いている九世其角堂田辺永湖は、明治十七年（一八八四）、機一の長男として生まれた。本名は栄一（本名を永湖とする資料もあるが間違いだらう）。別号に白雨山人がある。子どもの頃

から絵が上手かったようだ。昭和四年（一九二九）、俳誌『つ』を白雨社より刊行し、旧派俳諧から俳句結社への転換を計ったが短期で終刊している。昭和二十年二月十八日没。なお、明治期には佐竹永湖という絵師もいて、古美術商などときどき間違えて売られているから注意を要する

画賛に記された「乙卯」は大正四年（一九一五）。「叟」は老人という意味で、機一が還暦、その子永湖が三十二歳の年の合作ということになる。

〔図29〕は、右から、永機、機一、永湖の短冊である。永機の字は読みにくい

八千房会 年々に田蓑をさきの時雨哉 永機

だと思われる。「八千房翁会」と前書きにあるので、八千房流美の法要の会の句であろう。流美は、文政十二年（一八二九）に生まれ、明治二十五年（一八九二）二月十四日に没している。八千房の号は、翌年には無腸（4ページに解説）が跡を継いでいるので、没した年の法事の句ではなからうか。

機一のは、

金竜山拝景 幾万の切続く一は高灯籠 機一

で、前書きに「金竜山拝景」とあるから、東京浅草の浅草寺の盂蘭盆会の景を詠んだ句である。無数の灯籠が並ぶ中、ひとときわ高い灯籠が一つ立てられている、というのである。高灯籠は、屋外に竿を立て、お盆の灯籠を高く掲げたものをいう。

最後の永湖の短冊には、永湖自身が描いた正月の玩具の絵がある。句は、

起き競ふ子に雪晴の雀かな 永湖

子を見守る温かい眼差しが感じ取れる佳句である。



〈図
29〉



11 席題籤「俳諧五百題」

上部に小さな穴の空いた箱と、季語を記した竹簡のセットである。
〔図30〕の写真は、箱の周囲に竹簡を並べて撮影しているが、この竹簡を箱に入れ、それを振り出して席題を定めたと思われる。

「席題籤」は私に付した仮の名で、正式に何と呼ばれていたかは不明だが、箱には「俳諧五百題」と銘打たれている。箱は六・七センチ角で、高さが約十八センチ。竹簡は、幅八ミリ、長さ十一・五センチほどである。

〔図31〕に見られるように、竹簡には、表裏の上下にそれぞれ春夏秋冬の季語が配されていて、どの季節にも使えるようになっていいる。六十六本あるから、二百六十四の季語が記されていることになる。五百題というタイトルを考えると半分程度であるが、これは前の持ち主が紛失したのかもしれない。

箱の表に「俳諧五百題」（「俳諧」は角書^{つがき}）、「呈暉帝」とあり、裏面に「明治十九年極月新調之」とある。「新調」とあるからには、ずっと使っていたものが古くなったので、また新しくしたということであろう。ということは、この時代までは頻繁に使われていた道具ということになる。

記されている季語は今とそう変わらないが、「粥杖」とか「雪こかし（雪転し）」とかあつて勉強になる。ちよつと驚いたのは、「水」があつたことで、夏としていようだ。そう言えば、私も子どものころ、父に、水は夏の季語だと教わつた記憶もある。

席題を決めるのに苦労している人には今でも訳に立つ道具と思われるから、こしらえてみたらどうだろう。もつとも今なら、パソコンを使って、乱数で季語が出てくるソフトを作つた方が早いかもしれない。

私の周辺にはこれを使つたという人がいないが、地域によってはまだ利用されているかもしれない。ご存じの方は教えてください。

と有り難い。

ところで、〈俳諧五百題〉というと、普通は類題集の名である。類題集というのは、季語ごとに発句を分類した句集のことで、明治期まではよく作られていた。要するに解説のない歳時記である。少ないもので三百題、多いものでは、千六百題とか、三千題というのがある。眉唾のような気もするが、数えてみるとだいたいその数になっているから大したものである。ただし中には、千五百と謳つて半分しかなかったり、逆に八百題と名乗つて千を超えているというものもある。

江戸時代には、「季語」、「季題」という言葉はなかったということになっているが、「類題」という概念はあつたわけであるから、簡単に決めつけるのは危険だと思う。

明治期の類題集で、もっとも人気のあつたのが五百題である。必要最小限の季語は五百くらいということなのであろう。明治期だけで五十種類以上刊行されており、鳴弦文庫にも二十ほどある。その中で珍しいものをいくつか紹介しておく。

- 『俳諧今人五百題 三編』梅之本為山 明治期
- 『古人五百題発句集・故人五百題』松露庵主人編 明治期
- 『俳諧今人五百題 上下』八雲東溟編 明治期
- 『俳諧新五百題』田喜庵護物編 孤山序 明治期
- 『近古発句明治五百題』一事百古編 明元 金沢
- 『明治俳諧広涯五百題』楊州庵半湖編 明3 京都
- 『俳諧故人五百題』松露庵主人編 明18
- 『近古発句明治五百題』近八郎右衛門編 明19 石川
- 『俳諧明治五百題』語石庵精知編 明23 東京
- 『頭書季寄新選俳諧早手引 付古人五百題季寄注解』
竹林舎狐狗狸編述・瀬山佐吉編 明31 東京
- 『頭書季寄発句古人五百題』東籬園梅耕編 明31 東京

〔図30〕 席題籤「俳諧五百題」



〔図31〕 席題を記した竹簡



※表裏と上下で季節が分かる。「水」は夏、「初雪」は春に置かれている。「茶挽草」はカラスムギのこと。

初雪	春永	さひづり	真葛	田螺	野菊
茶挽草	蠅	菖蒲湯	頭巾	水	鴛鴦

12 市川右團治十三回忌の俳諧一枚摺

〈図32〉は、初代市川右團治の十三回忌に摺られた一枚摺である。初代右團治は、明治期に活躍した歌舞伎役者で、大正五年（一九一六）三月に没している。その十三回忌であるから、昭和三年（一九二八）に摺られたものということになるが、右團治とともに明治期に活躍した名優、市川團十郎の句も載るので、明治期の俳句文化を伝える資料としてここに紹介する。

初代市川右團治は、幕末の名優小團次の子。茶屋に生まれたらしく、小團次が東京に移ってから大阪の舞台を踏んでいる。それなりの事情もあった人なのだろう。しかし芸は超一流で、時代ものから、女形、ザンギリものまであらゆる役どころをこなし、踊りも名人と謳われて、角座の座頭となり、江戸から明治という時代の転換期に関西近代歌舞伎の基礎を作り上げる。墓は、大阪市天王寺区の西方寺にあるという。

この摺り物を作ったことになっている二代目右團治は、初代の実子で、名を右之助と言った。明治十四年に大阪で生れ、四十二年に中座で二世右團治を襲名する。発声に障害を抱えていたらしいが、それを所作の美しさや早替りのケレンで補い、父同様に人気を博したという。昭和十一年に五十六歳で没している。

二代目を襲名させると、初代は斎入と改名し、二代目の後見に徹したという。子の障害を思つての配慮だったのだろうか。そうであれば、二代目の親への思いも深かったであろう。

さて、〈図32〉に摺られた句であるが、一句目は二代目実川延若のもの。「蟬のなみだ」に驚くが、『新古今和歌集』に、「秋近きけしきの杜に鳴く蟬の涙の露や下葉染むらむ」とあって、それを踏まえているのである。蟬が赤い血の涙を流すという発想はかなり強烈なイメージで、何事も強調して表現する傾向のある歌舞伎という世界にはふさわしいレトリックだったかもしれない。

次からは月並な句が続くが、十句目の団十郎の句がなかなか読ませる。現代風に読み易く書けば「根分けせし牡丹の土を眺めても」ということになるのだろう。杏葉牡丹（ぎょようぼたん）は市川宗家の替紋であるから、これは一族のことを言っているわけで、宗家から分かれた家の名優を感慨深く思い出すという趣旨の句である。「土」とまで言っているところが読み所で、なかなかよくできた句である。また、発句というより、平句（連句の発句以外の句）の姿であるから、団十郎が連句を嗜んでいた可能性も匂わせている。また、団十郎の句を十句目に置くというのも、歌舞伎の世界らしい洒落の効いた趣向だと言えるだろう。

しかし、ここに大きな問題がある。九代目団十郎は、すでに明治三十六年（一九〇三）に亡くなっているのである。十代目団十郎は、昭和三十一年に亡くなった五代目市川三升に死後贈られた名であるから、このとき団十郎は存在しない。すでに鬼籍に入った人の句が、他の人の追悼句に混じっているというのはいささか不思議な感じもする。

おそらくこれは、こういうものがほしいという熱心なファンのために作られた摺り物なのである。とすると、最後に「父の十三廻忌営むとて」と二代目右團治が書いているけれど、本当に二代目の意図で作られたものかどうかとも疑ってみる必要があるかもしれない。

絵師、芳峰は大阪の浮世絵師である。本名を武部安兵衛といい、一梅斎、胡蝶楼、玉亭などの号を持つ。芳梅の門人で、長く大阪朝日新聞の挿絵を描いており、世間にはそれなりに知られた画家であった。成田屋（團十郎）が信仰していた不動明王を思わせる図だが、市川家一門を守護するものとして描かれているのであろう。その署名の前に「応需」と書かれており、二代目に依頼されて描いたということではあるうけれども、まさに人々の求めに応じて作られた一枚でもあったに違いない。



上段

初紅葉染るも蟬のなみたかな
身にしみて思ふものなり秋の風
簑むしの声やわか身に同じこと
秋風の吹てかなしき過た事
萩咲て露を泪と思ひけり
しみ／＼と思ふものなり秋寒
見る蔭ものふてはかなや破芭蕉
秋深き一夜／＼の哀れかな
暮れの秋御身に思ふ心かな
根分せし牡丹の土をなかめても
枯尾花見ても泪や秋の寺

下段

思ひ出す昔なつかし秋の雨
寝て見てもかなしきものや秋の夜
朝顔の露のめつしもはかなけり
蓮の身の飛て手向や水の中
寝もやらす昔思ふや遠きぬた
菩提樹の声て仏に手向たし
澄月に碰あはれを聞夜かな
秋の夜もの思ひ出すむしの声
露なから残りし菊を手向はや
暮て行秋をまねくか薄かな
敗荷を見てもむかしを思ひ出す
父の十三廻忌営むとて
寝さめにもむかしのことは
遠けれとわすれは
せまし父のことの葉
秋の夜灯籠花や手向たし

延若

嘉七

猿蔵

九蔵

八百蔵

駒之助

源之助

多賀之丞

蝦十郎

団十郎

多見蔵

左団治

小団治

時蔵

我童

瑠寛

能口

三津口

八十翁

川井新七

三榮

大情

右団治

門弟中

※口は難読文字

13 歌川国貞の錦絵「今様発句げいくらべ・菊寿」

錦絵（浮世絵）にはよく発句が記されている。歌川国貞の「江戸名所発句合」などのようにシリーズ化されているものも多い。錦絵を愛好する層と、発句を愛好する層が重なっていたということである。江戸庶民のそうした分野の教養は尋常ではない。

〈図33〉は、歌川国貞の「今様発句げいくらべ」というシリーズの内の一枚で、柳橋の芸者、菊寿を描いたものである。江戸末期の作品であるが、描かれている菊寿が、明治期にも活躍した芸者であるので、ここに記す。

国貞は、天明六年（一七八六）の生まれ。歌川豊国、英一瑠の門下で、後に三代豊国を名乗る絵師である。残した作品の数は江戸絵師中随一と言われている。文化年間に絵を描きはじめ、文政年間に美人画を描いて人気絵師となった。はじめは国貞と署名していたが、文政十年（一八一七）ごろから香蝶楼国貞と名乗るようになる。口絵の作品にも香蝶楼国貞と署名されているから、このころのものと分かる。油の乗りきった時期の作である。

弘化元年（一八四四）に豊国の号を継ぎ、二代豊国を名乗るようになるが、実際は三代目である。二代目を名乗った兄弟子を認めなかったということなのだろう。しかし、このころから、粗製濫造の作品が増えてくる。

その後、国貞舎豊国、一陽斎豊国などと名を変え、喜寿を迎えて喜翁豊国と称した。ほかにも、一雄斎、五渡亭、月波楼、琴雷舎、国貞舎豊国、北梅戸、富眺山人、富眺庵、雛獅豊国などを名乗り、元治元年（一八六四）、七十九歳で没した。

画に描かれた発句だが、右上部に「柳橋 菊寿」とあって、はつ霜や素笠目にたつ橋の上と記されている。

菊寿は、幕末、明治に活躍した柳橋芸者で、成島柳北の『柳橋新誌』にも登場する。若いころに柳北は、二百人を超える柳橋芸者の中から、美貌と教養を併せ持つ二十四人を選び、それぞれを花にたとえて「柳橋二十四番花信評」を著した。しかし、明治となった今は、その中で「阿幸、菊寿、政吉（阿郁）、阿蓮」の四人しか残っていないと、時の移ろいを悲しむくだりである。

さて、句意だが、「素笠」は、げんせい「簪位」を示す帽子ではないただの笠という意味で、『三国史記』の元聖王の故事に出てくる言葉である。素笠をかぶる夢は王になる吉兆だという話であるから、この話を踏まえているとすれば、自分のところに来る客は、真の意味での上客が多いと言っていることになる。質素な身なりだけれど、うちに来る客は、実は中身のある将来有望な客ばかりなのよ、ということとで、菊寿という芸者の、ただならぬ教養を示している。これを実景として解釈しても、二階から、初霜で白くなった橋の上を行きかう丸い笠を見下ろす、という構図になっている見事である。

絵の方もなかなか凝っている。左側で光っているのは火打ち石だから、これは菊寿が、置屋から料理屋へ出掛けようとしているところを描いた図であろう。出掛ける人の無事を祈って火打ち石の火花で送り出す光景は、銭形平次などの時代劇によく登場する。左上の囲いの中の意味ありげな夜景は、おそらく菊寿がこれから向かう店の周囲なのだろう。天水桶の家紋が、店の名を示していると思われるが、今となつては店の名を特定するのは難しい。

〈図34〉は、豊国と署名があるから、明治三年以降の作品である。「立花の鶴吉」の名で

人なみの世も渡りたし秋の川 家橋

という句が書かれている。どうやら尋常の人生を踏み外した男のようだが、どのような話なのかは不明。他の豊国の錦絵に、「橋の鶴吉 市村羽左衛門」と記されたものがあり、この画も羽左衛門と思われる。おそらく十四代目であろう。



14 秋元梧楼編『明治百俳家短冊帖』

『明治百俳家短冊帖』は、明治の俳人百人の短冊を石版で摺った豪華な折本である。大正元年と二年に天地二巻が刊行されている。所蔵している図書館は極めて少なく、天地を揃えているのは宮内庁書陵部と大阪府立中之島図書館。地の巻を持つのは国会図書館と三康図書館（増上寺）で、天のみ架蔵するのは鳴弦文庫のみである。

編者の秋元梧楼は、茨城県新治郡玉里村の生まれで、元の名は矢口常五郎。千葉県の流山で代々味醂業を営んでいた秋元家の娘婿となつて秋元姓となった。病弱だった九代目に代わつて家業をやりくりし、その傍ら『ホトトギス』で俳句にいきしんだ。俳号は虚受。小林一茶のパトロンとして有名な秋元双樹が五代目という家系であるから、一族に俳諧を嗜む人は多かったようだが、新派の俳句を流山に持ち込んだのは梧楼が最初と思われる。

明治三十五年に秋元家に入った梧楼は事実上の経営者となったが、十代目を名乗らず、俳句に情熱を傾け、明治の末に、下村為山ら当時の有名画家に絵を描かせた短冊を持つて著名俳人を訪問し、天の巻、地の巻二冊の短冊帖を完成させた。

この本が有名になったのは、宮内省のお買い上げとなつて、それが新聞記事になったからである。当時の宮内省が俳書を買うというのは、それほど珍しいことだったのである。現在の宮内庁書陵部の目録にも、確かに『明治百俳家短冊帖』があつて、申請すれば閲覧もできる。

鳴弦文庫は天の巻を架蔵している。序文は夏目漱石、題句は内藤鳴雪で、松根東洋城、大谷句佛、尾崎紅葉、荻原井泉水、渡辺水巴ら三十四人の短冊が収録されている（図35）。

（図36）は、右から碧梧桐、漱石、虚子のものだが、それぞれ短冊の絵に合わせて画賛に近い句を書いている。

藻のともる浪ずれや瀬の祭る魚
橋なくて遂に渡れぬ枯野かな
番傘に揚屋の下駄やはるの雨
碧梧桐
漱石
虚子

碧梧桐の句は「瀬^{かわせ}魚を祭る」を詠んだ春の句で、いわゆる新傾向俳句だが、絵の景に真向かつて詠んでいる。絵本のような手法であるが、「瀬」をもってきたのが手柄で、「瀬祭」がこの短冊帖の経緯と重なる面白さが生まれている。たしかにこの短冊帳は、カワウソが魚を並べるように、短冊が並べられているのである。

漱石の句は、絵に描かれていない「橋」を詠んで物語を生み出しており、実に小説家らしいもつていき方だと言えるだろう。

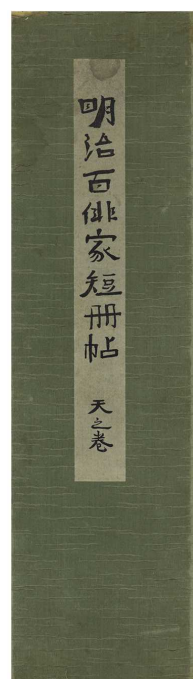
虚子のは、燕の絵に「はるの雨」の句を付けている。これは、燕が低く飛ばば雨になるという淡い連想からのつながりで詠んでいるわけで、まさに伝統的な画賛の手法と言えるであろう。

こうしたことにも、三人の俳句観、文学観の違いがよく現れている。これが、絵とともに俳句を鑑賞する醍醐味で、俳句だけ読んだのでは分からないことが見えてくる。

（図37）は、漱石の序文だが、近頃は句も読まず、俳壇とは疎遠で、これという意見もまとめかねるから、悪詩一首をお詫びのしるしに差し上げると書かれている。その手紙をそのまま序としてしまったのも面白いが、落款も押されているから、漱石もそのつもりだったのであろう。詩は七言絶句で、

雲箋有響墨痕斜 好句誰書草底蛇
九十九人渾是錦 集将春色至我家

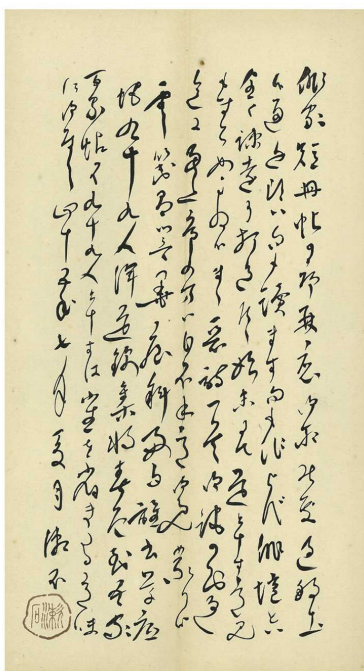
とあり、最後に「百家帖に九十九人と申すは小生を省きたる意味に御座候」とあるのも漱石らしい。



〔図〕
36



〔図〕
37



15 俳諧の伝統を今に繋ぐ美濃派宗匠

旧派俳諧の門流は、明治、大正期につきつぎと姿を消した。しかし、平成の今に流れをつないでいる人たちもいる。美濃派と呼ばれる獅子門の一統もその一つである。

獅子門は各務支考の門流で、芭蕉を一世、支考を二世と数え、五世のときに以哉派と再和派に別れるが、昭和四十八年、三十七世各務於菟が両派を統一し、今に至っている。

〔図38〕に示した短冊は、右から以哉派二十九世山田三秋、三十世南谷翠濤、三十一世恩田憲和、三十二世高橋清斗（二枚）、三十世足立吾柳のもの。いずれも昭和の激動期に旧派の伝統を守り伝えた宗匠たちである。いずれも、明治期のものではないが、短冊の上を空けて書き始めるなど、当時の俳諧文化を現代につなぐ資料であるので、ここに紹介する。

山田三秋は、明治八年、岐阜県本巣郡西郷村に生まれた。二十七年の長屋其馨に俳諧を学び、和歌を佐佐木信綱に学んだという。昭和十五年没。『獅子門俳人名鑑』（昭和12）、『花の雨』（昭和14）などを残している。

月天心大河しつかに流れけり

三秋

いかにも蕉風の風格を持った大きな句で、正岡子規なら「理想美」と評しそうな世界を作り出している。「春風はゆたかなる人の心よりわきいてぬらし和らかに吹く」などの短歌も残しており、ロマン主義の影響も感じられる。

南谷翠濤は、明治六年、羽島郡松枝村に生まれた。

河中に出湯のありて水涸るゝ

翠濤

着眼点におもしろさがある。「草もちの杵を代りし女かな」などの句もあり、視線に強い主情が感じられる。

恩田憲和は、明治五年生まれ。武芸村に生まれ、昭和二十二年没。

偉ある哉との感激を旗の春

憲和

おそらく戦時中の句ではないかと思われるが、美濃派の蕉風も、こうなると明治期の明倫講社風である。

高橋清斗は、明治十二年、松枝村に生まれた。戦後、三十二世となり、獅子門俳諧作法を笠松町の無形文化財とし、また『獅子門俳諧正式作法』を著すなど、俳諧文化の継承に力を尽くし、昭和三十三年に没した。

明月や石の鼎に魚あふる
舌にきゆる梨の甘さよ月にむく

清斗
清斗

一句目は蕉風の骨格を持つ句であるが、どこかモダンな詩情を感じさせる。二句目などは、戦後の中村草田男や中島斌男などに通じる時代性をも感じさせる響きがある。下五が「月に剝く」だとかなりおもしろいが、「向く」だとしても、戦後の現代俳句としての水準を十分に備えた句である。

三十三世足立吾柳は、明治九年、不破郡宮代に生まれ、自在庵、自由庵、春和坊などを名乗った。昭和二十八年没。

御忌を撞く鐘に曇れり東山

吾柳

「を」の使い方が俳諧的で、旧派の面目躍如。こうした言い回しは現代俳句にも残したい。「馬に乗りて日傘さしゆく女かな」などの句もあり、美濃派の「俗談平話」を心がけた人だったに違いない。こうして並べてみると、美濃派という枠組みの中に宗匠それぞれの個性があり、個々の作品にも時代空気がある。五人とも『俳文学大事典』（角川書店）に解説のない俳人だが、俳人としての実力も、俳句史に残した実績もかなりのものである。旧派という先入観だけで遠ざけるような評価は、そろそろ終わりにしたい。



16 『明治俳豪の俳』

明治という時代がもう終わるといふ予感があつたのだろう。明治十五年六月、兵庫県淡河村の霞吟場から、『明治俳豪の俳』が刊行される(図39)。明治期の宗匠百八十人の写真に掲載し、その代表句と略歴、主張などを掲載した本である。翌七月の三十日に明治という時代が終わりを告げるのであるから、怖ろしいほどのタイムイングでこの本は刊行されたことになる。

著者は霞流庵淡秋(松村唯一)。千葉県香樹園耕雨が校閲している。藤原孤鶴と不識庵聴秋が題辞を記し、羽洲園羽洲、角田竹冷、内藤鳴雪が題句を寄せている。序は柿本秋邨。静岡の大蕪庵松島十湖が跋を書いている。

今となっては、それぞれの地方の俳句史を調べても手に入りにくいと思われる宗匠らの写真と代表句が一覧できるのであるから、これほど便利な書物はない。

(図40)が写真の最初のページで、右上が上田聴秋である。本書の第六章に記したように、岐阜から京に出て、『鴨東新誌』を刊行し、京都随一の人気宗匠となった人。「海程」同人で、自由律俳句の研究者である上田都史の祖父に当たる。明治の末期には旧派の第一人者であつたのだろう。この本の題辞を書き、巻頭に写真を置かれている。

(図41)の左上は、馬田江公年。知る人は少ないだろうが、柳原極堂の編集した松山版『ほととぎす』創刊号の「奉額俳句募集広告」に、正岡子規と並んでその名がある。これは松山第二十二連隊の招魂社の竣工を記念して企画された奉額俳句の募集なのであるが、おそらく初期の子規と選者を務めた唯一の旧派の宗匠であろう。本名は山田重五郎。大阪の人で、明治四十二年に『俳諧季寄兼用題意註解玉兔』の著書がある。この本がなければ、この人の顔を知ることにはなかつたであろう。

(図42)の右上が松島十湖である。本書の第二章に少し登場したが、嘉永二年(二八四九)、遠州浜松に生まれ、嵐牛、春湖に学んで、七十二峰庵、大有庵、年立庵、大蕪庵などの号を持った。報徳運動家で静岡県議も務め、地域農業の振興に努めた人。この本の跋を書いている。

(図43)の左上が、この本の校閲をした香樹園服部耕雨である。本名、服部治左衛門。嘉永五年(一八五二)に下総の国琴田(現在の旭市琴田)に生まれ、服部家の養子となり養父柏園に俳諧を学んで、指頭庵、香樹園を名乗った。明治二十九年十二月、千葉県豊鳴村(現在の海上町)から月刊俳誌『俳諧評論』を刊行。やがて上京し、東京の湯島から刊行するようになる。秋声会の機関誌的な俳誌であつた。

こうして、一人一人の写真を見ていると、それぞれの生き方が感じ取れる気がするから、不思議なものである。

(図39)『明治俳豪の俳』





17 大塚毅編『明治大正俳句史年表大事典』

近代俳句に少し詳しい方なら、新井声風の編んだ『木歩句集』（素人社書屋・昭和9年）についてはご存じだろう。下肢に重い障害を抱え、そのために関東大震災で焼死した貧困の俳人富田木歩の句を、死後、声風がまとめたものである。

震災の当日、木歩を助けようと隅田川を渡った声風は、木歩を背負って逃げようとしたのだが、火の手に囲まれ、二人は別れを覚悟。声風は熱風によって川に吹き落とされ、木歩は焼死する。声風は、その後の人生を、木歩の句を世に残すことに費やすのである。

その声風が、『富田木歩全集』（世界文庫・昭和39年）を編むにあたって、登場する人物の生没年などの確認を依頼した相手が大塚毅であった。

毅は、明治三十三年、大分県入田村（現・竹田市）に生まれた。毅は本名である。関東大震災を期に短歌、俳句に志を抱き、短歌では池田毅、俳句では晩成子と名乗るようになる。やがて震災で失われた明治大正期の俳句資料の調査に情熱を燃やすようになり、慶応大学を中退して、本格的に明治大正俳句史年表の作成にとりかかる。震災で失われたものの記録を何としても後世に残そうとしたのである。震災の喪失感を創造のエネルギーに転換したとも言えるだろう。その情熱と地道な努力を知っていた声風が、『富田木歩全集』の事実確認を託したのである。

毅はその後文部省属となり、山口大学文理学部事務長などを務め、戦後は光村図書出版株式会社に勤務して教科書の作成に従事するが、その間も年表の作成は継続されていた。

光村図書出版退職後、毅は成果をまとめ、世界文庫から『明治大正俳句史年表大事典』を刊行しようとする。ところが、再三にわたる原稿の修正に印刷所が音をあげてしまい、出版が頓挫しそうになる。当時の写植によるフィルム製版では、現在の電子製版のように

は簡単に文字の修正ができなかったのである。

そこで毅は、自筆で版を起こすことを決意し、ついに〈図44・45〉のような手書きの大事典を完成させる。この分厚い事典の文字のすべてのページは、毅の自筆なのである。

しかし、これほどの労作も、研究者から高い評価は得られなかった。発行の翌年には、角川書店の「俳句」誌上で村山古郷に「生涯の労作」と紹介されたりもしたが、その後、あちこちに細かな誤りが見付かり、使えない事典というレッテルを貼られてしまう。

けれど、だからといってこの事典の価値がなくなったわけではない。この事典にしか記されていないことがらも多いのである。筆者は、数十ヶ所に訂正を入れてこの事典を使っている。次の書物など、この事典にしか記載がなく、それを手がかりに古書店で探しあて、今は鳴弦文庫に架蔵されている。今でも、明治期の俳諧・俳句を調べようとするのであれば、一冊は手元に置いておかねばならない事典である。

『木の葉串』奇泉編 華兄序 明治3年 〈図46〉
『蓑虫集』翠艾編 明9年 〈図47〉
『時雨祭集 第一冊』教林盟社 明治11年
『ふたもも年集』対山編 曲川序 明治25年
『不老仙』村山抱月編 羽州跋 越後 明治27年
『卯毛集』松田宰治編 秋山樵支跋 精巧堂 明治30年

毅には、震災で何かを失った喪失感があったように思う。その心の隙間を『明治大正俳句史年表大事典』完成へのエネルギーに転換し、半世紀にわたって志を継続させたのである。

思えば、今回の東日本大震災で亡くなった俳人、失われた資料も数知れない。それらを掘り起こし、記録する作業も重要なのではないかと思われるのである。

